オニヤンマの声

池田　知隆

坪倉宏夫さんってどんな人でした？　と聞かれても、私はほとんど何も知りません。沖浦和光さんを囲む集まりで、何度か顔を合わせたことがありますが、それも両手の指で折れるくらいの回数です。いっしょに旅をしたわけでもなく、それほど深いお付き合いがあったわけではありません。それでも、どんな人だったかなと、思いを膨らませていくうちに、どういうわけかオニヤンマの顔が浮かんできました。

メガネの奥で、獲物を探しているかのようにギラギラと光らせている眼。泡を飛ばして語る口角。頑丈そうなあご。そんな坪倉さんの顔がどこまでオニヤンマに似ているかはさておき、家庭園芸を楽しみ、世界各地を旅して「動く紙芝居」を作るなど好奇心にあふれるお姿が、自然のなかを自在に飛び回るトンボと重なって見えたのです。

緑の眼をした厳しい顔に、黒黄の縞模様からトラの皮の褌を締めた鬼を連想して名付けられたというオニヤンマ。日本最大で、最強のトンボといわれ、飛行速度は時速70㎞にも達し、4枚ある羽を別々に動かすことでホバリングなど多彩な飛行が可能だそうです。肉食性で、その大きなあごを駆使して蚊やハエ、セミなどを食べているとの報告もあります。

複眼といわれるトンボの目は、ハチの巣のような六角形をした個眼が1万個～3万個あるそうです。個眼で見えるのはそれぞれ違う映像で、それが脳の中で一つの映像として認識され、その視野は上下左右前後、約270の角度ほぼすべて見えているようです。

小学校の教師だったという坪倉さんもきっとそんな複眼の持ち主だったのではないでしょうか。単眼には多くの教え子たちの残像があり、複眼の機能を活かして教育や人権の問題に取り組まれたと思います。また、子どもたちにとって楽しい授業をするには、教師自身が楽しまなくてはなりません。どうすれば分かりやすい授業ができるのか。教材に何を使えば効果的で、子どもたちのやる気をどう引き出すのか。教師もまた、漫才でいう「つかみ」、落語の「まくら」を考え、マンガ、芸能、スポーツから政治・経済までいろいろなことに好奇心を持っていなくてはなりません。

退職後、戦争や社会の動きをテーマに作られた「動く紙芝居」には、そんな坪倉さんの「学び続ける心」が満ちていました。教師時代は、授業の合間の雑談がおもしろく、なによりも教えることに熱い思いをもたれた人だったと思います。

都会ではトンボを見る機会が減ってきました。教育現場にもトンボのような複眼をもった教師が少なくなってきているようです。

トンボは死んでも飛んでいるときと同じ羽を広げたままの姿でいる、と聞いたことがあります。坪倉さんはあの世でも大きな複眼で見渡し、オニヤンマのように舞っているのではないでしょうか。

「もう一度、人生を生きなおすことができるとすれば、どんな仕事を選びますか」と聞けば、「それはもちろん、教師だよ」というオニヤンマの声が聞こえてきそうです。それは幻聴でしょうか、坪倉さん。

「坪倉宏夫さんを偲ぶ」（追悼文集編集委員会
2021年4月25日